

ダイズサヤタマバエ

1 形態と生態

- (1)ダイズサヤタマバエは成虫が約 3mm 程度で蚊に似ており、腹部が赤みを帯びたハエです。
- (2)成虫は夕方から活動し始め、夜間にダイズの若い莢に産卵します。日中ではよほど注意しないと成虫を見ることはできません。
- (3)1 世代に要する日数は約 1 ヶ月で、ダイズ(エダマメ)の他、ハギ類、コマツナギなどに寄生しますが、越冬についてはまだよくわかっていません。



写真 1 莢内の幼虫

2 被害の様子

幼虫によって幼莢内が食害されるため、被害莢は小さくコブ状にふくらみ生長しません。開花間もない頃に被害を受けると落莢することもあります。このため、多発すると収量に大きく影響します。

被害莢を割ると、幼虫と白いカビ(共生菌)が確認できます。また、羽化脱出時に蛹の抜け殻を莢から半分出た形で残すのでダイズサヤタマバエの被害と確認できます。



莢内の蛹



蛹の抜け殻



羽化後の被害莢

3 発生について

(1)発生条件

- ア 暖冬年や夏期の温度が高いと、多発しやすくなります。
- イ 開花期が 8 月中旬以後になる栽培法では、被害が大きくなります。
- ウ 早生、中生品種では被害は小さく、晩生種で開花期の長い品種ほど被害が大きくなります。
- エ 品種による被害差は、開花期と発生時期の重なりによるもので、真の耐虫性ではありません。
- オ 疎植より密植の方が被害は大きくなります。

(2) 発消長

本害虫の発生は、6月上旬から10月上旬まで年5～6回発生し、8月中旬から9月上旬にかけて発生のピークを迎えます。

本県のダイズは麦あとに栽培する作型が中心で、その場合は8月下旬から9月にかけて開花するため、被害を受けやすい傾向があります。

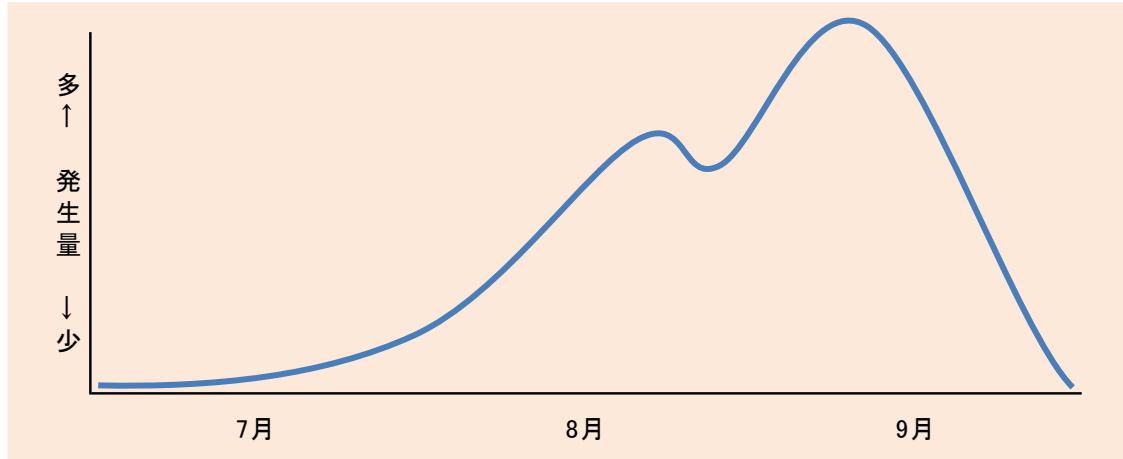


図1 ダイズサヤタマバエの発消長

4 防除時期と防除方法

薬剤防除は被害発生前に被害程度を予測して成虫を対象に行います。薬剤散布時期は、開花終期～莢伸長期（開花始めから1～2週間後）が適期で、防除回数は通常1回で十分です。液剤を散布する場合は、花や莢に十分かかるように散布します。粒剤や粉剤は、葉面ではなく茎や株元に散布します。

実用的な予防方法はありませんが、耕種的な被害回避法として過度の密植を避け、開花期が8月上旬以前になるように栽培すれば被害が少なくなります。ただし、播種時期を早くすると、わい化病や萎凋病が発生しやすくなるので注意が必要です。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県